

かずさの博物誌

ノビタキ(野鶲) ～秋の草原は 渡りの中継地～

文・写真／成田篤彦



©成田篤彦

▲ノビタキ ツグミ科。大きさはスズメくらい。本州の高原や北海道の平原で繁殖。冬は東南アジア地方に渡る。上総では渡りの途中、春と秋に通過するが、秋の方が多い。2008年10月13日 木更津市(筆者撮影)

先年の秋、盤洲干潟に行つた。好天だったが、砂が飛ぶほどの強風であった。そのせいか干潟に野鳥がほとんど現れなかつた。「野鳥と会えず残念」と思いつつ海岸沿いのアシの原野の中の小道を戻つてきた。すると灌木の枝先に一羽の薄茶色の小鸟が止まつていていた。頻繁に近くのアシの葉の頂に飛び立つては元の枝先に戻つてくる。種名がわからないまま急いで、シャッターを切つた。図鑑で調べると冬羽のノビタキであつた。しかし、強風でピントが少しずれていた。

「中にヒナがいた。だから逃げなかつたのか?」と思つてすぐにその場所を去つた。

それから、もう37年が過ぎた。先年の秋に見たノビタキは羽毛の色彩が目立たない橙黄色で全く違つていた。これでは素人の私がノビタキと気づくわけがないと思った。さて、彼らは丈の高い植物の頂に止まる癖があるから、盤洲の原野で探せば、また撮影できるかもしれないと思いついた。翌日、海岸の原野に再び赴いた。背丈が2m以上もあるアシやセイタカアワダチソウやススキがびっしり生える草むらをかき分けて歩いていると、藪の中から「ビツ、ガツ、ガツ、ヒツ、ガツ」と鳴き声が聞こえた。「あ、ノビタキの声?」と思つた。腰をおろして、彼らがその周辺で好んで止

つれあうように飛んでいるのを見つけた。1羽は頭や背が黒色、もう1羽は黄褐色であった。前者がノビタキの雄で後者が雌。雄は近づくとすくに飛び去つた。しかし、雌はガの幼虫をくわえ、マツヨイグサの枯れた茎の頂に止まつたままであつた。私がカメラを向けても飛び去ろうとささらに近づくと「逃げるか?」と思つたが、動かずこちらを見ている。私がカメラを向けても飛び去ろうとしない。「おかしい」と思つて、少し離れて腰をおろすと草の根元に素早く潜り込んだ。小石がごつごつある地面にお椀のような巣があつた。

アワダチソウにカメラを向けて、「どうかそこに止まってください。」と願いつつ待つていた。すると、ねらいどおりにその花の上に1羽のノビタキが藪から飛びあがってきて止まつた。そよ風に揺られながら、右や左を見て、ハナアブがよつてくると舞い上がり、元の位置に戻つてくる。また、草むらの中に飛び込んで、同じ場所に戻つてくる。それを何度も繰り返していた。そばにいる私に気づいているはずだが、目もくれずにしばらく付き合つてくれた。

アワダチソウにカメラを向けて、「どうかそこに止まってください。」と願いつつ待つていた。すると、ねらいどおりにその花の上に1羽のノビタキが藪から飛びあがってきて止まつた。そよ風に揺られながら、右や左を見て、ハナアブがよつてくると舞い上がり、元の位置に戻つてくる。また、草むらの中に飛び込んで、同じ場所に戻つてくる。それを何度も繰り返していた。そばにいる私に気づいているはずだが、目もくれずにしばらく付き合つてくれた。

澄み渡る秋空の下、原野一面に広がる薄緑のアシ原、その中のところどころにセイタカアワダチソウが黄色の花を咲き誇つている。そこに眼がくりくりしたかわいらしいノビタキが飛びかう姿を見ると上総の真つ盛りの秋に浸つているようでいい気持ちであった。

ところで、ノビタキは日本では夏に本州の中部以北の標高800~2000mの高原で、北海道では平原で繁殖する。冬期、東南アジア地方へ渡る。上総では春と秋に見られる旅鳥で、特に9月中旬から10月下旬にかけて秋の移動途中と思われるものが水田や草原、耕作地、河川敷などの草地で見られるという。

私が知らなかつただけで、毎年、彼らは何度も上総の広い草むらに訪れて旅の疲れを癒して、去り続けていたのであろう。今年もきっとやつてくるから、皆様も一度、この秋に愛らしい姿を見てはいかがでしよう。



©成田篤彦

▲ノビタキの雌
草の頂に止まり虫などをとらえる。草の根元や地上のくぼみなどに巣をつくる。1972年8月2日 長野県野辺山高原(筆者撮影)

ノビタキと言えば、かつて上総地方に赴任したころ、夏季に八ヶ岳山麓の野辺山高原の荒地で見かけたことがある。荒地はなだらかな斜面に

ノビタキと言えば、かつて上総地方に赴任したころ、夏季に八ヶ岳山麓の野辺山高原の荒地で見かけたころして、彼らがその周辺で好んで止

参考文献

千葉県2002「千葉県の自然誌本編6」